第8回 絹谷幸二賞

若手画家の創作を支援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第8回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）が、柏木健佑さん(27)に決まった。奨励賞には横山奈美さん(29)が選ばれた。贈呈式は17日、東京都千代田区の学士会館で行われる。【広瀬登、永田晶子】

奇妙な光景 精密に

柏木 健佑さん

昨年3月の初個展での受賞。「やってきたことが認められ素直にうれしいし、ありがたいです」。静かな表情で喜びを語る。

東京都国立市のコート・ギャラリー国立に並べたのは過去3年間に描きためた油彩の大作群。空中に浮く男、地面から飛び出す巨大な舌、流れ落ちる大量の畳……。

不穏な空気が漂う奇妙で不思議な光景を古典的技法で精密に描き、見る者を驚かせた。

意味ありげなイメージの奔流は幻想小説の一場面のよう。だが「物語性を意識したことはありません」と断言する。「いろいろなモチーフを組み合わせて画面に配置した時、どう見えるかに興味があります」

たとえば昨年、個展の直前に制作した「いや、それは出来ない」は図像学の本に載っていた古い版画が着火点。壁に頭を押し付けたポーズが印象に残り、それを核にして全体構成を考えた。古めかしい人物や道具、建物を作品中に盛り込むのは「特定の文脈や時代に吸収されたくない」という思いからだ。

「言葉が宙に浮くような、画面状況を単純に受け止めてもらえる絵を目指しています」。北海道での高校時代、鈴木清順や寺山修司の映画を見てシュールな表現に開眼。大学ではブリューゲルらの北方ルネサンス絵画に親しみ、骨董店や古物屋めぐりを好む。「滅びゆくものへの愛着」を自覚しつつ、作品は現代的な昇華を心掛けている。

昨年、博士課程入学に伴い、埼玉から茨城に引っ越した。「環境や考えの変化につれて描く絵も変わってきます。最近、やっと自分の〝アンテナ〟が合ってきた感じ」と笑う。今後のさらなる変身が楽しみだ。

「いや、それは出来ない」　2015年

かしわぎ・けんゆう　1988年北海道生まれ。筑波大学大学院博士課程（芸術専攻絵画領域）在籍中。茨城県つくば市在住。　＝内藤絵美撮影

さまざまな解釈誘う

島敦彦・愛知県美術館館長

柏木健佑さんの絵画は、荒唐無稽な不条理劇を思わせる光景で見る人をくぎ付けにする。登場するのは男性ばかりで、壁に頭を打ち付けたり、浮遊したり、裸体もあれば正装の人もいる。扉や鏡、布や畳、あるいは自身が創作したオブジェなど、いろんな小道具も駆使して、超現実的かつ不可思議な場面を緻密に描き出す。人間の深部に潜むおぞましい欲望や暴力性などにも言及しているようでいて、それほど深刻にならずユーモラスな一面もある。さまざまな解釈を誘引する特異な絵画として大いに注目された。

一方、日本で油彩画を描くことの困難を自覚しつつ、独自の具象絵画を追究する横山奈美さんは、ミカンの皮やひも、あるいはトイレットペーパーの芯など、普段は顧みられない対象を克明に描く。特に近作では、描く対象を大画面に展開することで、異様な存在感を醸し出している。リアリズムの新たな地平を開く可能性を感じた。

●選評

未知数の可能性評価

飯田志保子・東京芸術大准教授

柏木健佑さんの作品を見た時、描かれた情景をどのように受け取れば良いか戸惑いを覚えた。時代も国家も象徴化され、政治混乱や社会不安を想起させる奇妙不可解な場面にシュールレアリスティックに描かれた人物や物体が配置されている。緻密に構築され細部まで目を奪う画面には、深層心理や事件性をほらんだ底知れない物語を読み取らずにはいられない。マグリットやブリューゲルなど柏木さんが参照する巨匠のみならず、ドイツのネオ・ラオホや台湾の陳敬元といった同時代の画家に通じる現代性も持ち合わせる。定型の解釈を与えず見る者を躊躇させる未知数の可能性を評価した。

横山奈美さんは絵画が本質的に持つ荘厳さの体現を実直に試みている。高橋由一ら近代画家が洋画を憧憬したであろう眼差しを自身に重ね合わせ、些細な物に迫真の物質感を与えモニュメント化する実践に、ユーモアと近代美術史が統合されている点を評価したい。

遊びにあふれている

鴻池朋子・美術家

きちんとした技法で描けば描くほど古くさく戦後的風味が加算される若い作家である柏木さんの絵。昨今、他者と繋がることばかりが尊重される中で、言語は人間の最終コミュニケーション道具ではないときちんと表現してくれる絵に出会えるとすごいし信頼を感じる。絵画における他者との断絶とは、絵を描く上でとても重要なものに真摯にアプローチしようとするゆえの作家の所作なのである。また画面を見つめていくと、決して思想的で寓意的な作品ではない大いなる遊びに溢れていて、そこにこの作家への秘密の通路を発見して嬉しくなる。絵は作家本人も気づかないものが出てしまうから面白い。

横山さんの絵は馬鹿馬鹿しいほどの物への集中力が今むき出しのまま表れていて清々しい。今どき、絵画と正面から向き合って格闘する人なんかいるのだろうか。否！　絵画賞にはそんな逸材と出会える喜びがあるのである。

●選考過程　29人対象に

毎日新聞社が若手画家の作品に詳しい全国の美術館学芸員、美術評論家、ジャーナリストら59人に候補者の推薦を依頼、33人から回答があった。候補にあがったのは26歳から35歳の29人（うち4人はそれぞれ2人から推薦）で、女性は16人。候補者にはポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に発送。選考委員はそれらを精査し、開催中の展覧会で作品を鑑賞可能な場合は足を運んだ。

1月26日の1次選考会は各委員が印象に残った候補計16人を挙げて個々に検討。オリジナリティーや絵が発する力、今後の可能性などを論議し、柏木健佑、佐藤翠、横山奈美の3氏に絞り込んだ。その後、選考委員は各候補のアトリエや所属画廊を訪問し実作品をチェックした。

2月12日の2次選考会は、柏木と横山に評価が集中。「純粋に面白い絵」「悲劇性、ユーモアなどが混沌としている」と評価された柏木が「さらなる飛躍が期待できる」として本賞に選ばれた。横山は「作風に振幅がある」「対象といちずに向き合っている」と評され、奨励賞に決まった。佐藤は完成度の高さが認められたが、一歩及ばなかった。

◇推薦された人たち
伊勢田理沙、伊藤彩、上里洋、梅津庸一、小川直樹、小倉ゆい、柏木健佑、川田知志、菊谷達史、佐藤翠、塩月悠、下出和美、炭田紗季、瀬尾夏美、田中千智、土井沙織、當銘弓佳、富田直樹、中尾美園、西村有、花井このみ、福本健一郎、水口鉄人、水田寛、山地咲希、山本もえ美、横山奈美、吉田翔、渡邉瑠璃

◇回答を寄せた推薦者
石川健次、O　JUN、尾崎信一郎、加藤義夫、北島洋一、児島やよい、小吹隆文、小松崎拓男、渋沢和彦、清水有香、正路佐知子、角奈緒子、竹口浩司、中井康之、名古屋覚、西澤美子、野地耕一郎、原久子、土方明司、藤田一人、藤本真帆、保坂健二朗、堀元彰、牧口千夏、牧野裕二、三井知行、村田真、山口裕美、山下裕二、山中俊広、山本淳夫、渡辺亮一、和田浩一

（50音順、敬称略）

●絹谷幸二賞

日本を代表する画家の一人で、文化功労者の絹谷幸二さん＝写真＝が2008年、毎日新聞社に呼びかけて創設された。絹谷さんは1974年、当時具象絵画の登竜門となっていた安井賞（本社主催、96年度の第40回で終了）を31歳で受賞。画家として生きていく自信を得た体験から思い立った。創作の傍ら、後進の指導にも力を注ぐ。東京芸術大名誉教授、大阪芸術大教授。日本芸術院会員。

対象は35歳以下の画家。前年、国内で開かれた展覧会などで発表した具象的傾向の出品絵画を選考する。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。

劣等感からの美

奨励賞　横山 奈美さん

横山奈美さんの作品「逃れられない運命を受け入れること」＝川崎市岡本太郎美術館で、徳野仁子撮影

暗闇の中に、巨大なトイレットペーパーの芯がそびえ立つ。縦259㌢、横194㌢の大作「逃れられない運命を受け入れること」では、「姿を現したと思ったらつぶされ、捨てられていく芯の最期を、映画『2001年宇宙の旅』に登場する謎の物体『モノリス』のような人知を超えた存在として描いた」という。

「逃れられない運命」。作品名にある言葉を自身に重ねる。小学2年の時、両親とイタリアのウフィツィ美術館を訪れ、ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」を見た。絵の前に立ち尽くすこと1時間。「崇高で神様のような絵を描きたい」。そんな思いが芽生えた。同時に、中学生のころは米ポップ歌手、ブリトニー・スピアーズにあこがれもした。

だが、自分が生きる日本は欧米とは環境も絵画の伝統も大きく違う。金髪のウイッグをかぶっても、ピッチリしたTシャツを着てもブリトニーにはなれない。

「どうしようもないことを受け入れる。劣等感の中からしか、真の美は生まれないのでは」。悩んだ末、そう思えるようになり絵筆を握る。近年、もやしや縄をモチーフにするのも、やがて捨てられる運命から逃れられないから。「それらを同じ目線で観察し、美しさを見つけていくのです」

受賞を「驚いた」と話すが、第19回岡本太郎現代芸術賞でも入選、着実にステップアップしている。今、もう一度、「ヴィーナスの誕生」の前に立ちたいという。「『たいしたことない』と思うか、『やっぱりすごかった』と思うか。その隣に置いてもおかしくない、自分しかできない作品を作りたい」

よこやま・なみ　1986年岐阜県生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画・版画領域修了。茨城県取手市在住。　＝徳野仁子撮影